

公教育の近代化に対する二重の危機感——マレー・コミュニティにおける子どもの教育論から

金子 奈央

東京外国語大学大学院博士後期課程

1. はじめに

本稿は、『カラム』誌に掲載された教育関連の記事を取り上げ、1950年代および1960年代にマレー・コミュニティの中で、教育に関するどのような議論や意見が展開されていたかについて考察する。『カラム』は1950年にシンガポールで創刊され、それから約20年に渡って発行され続けたジャウィ綴りのマレー語による月刊誌である。この時期のマレー半島において新聞や雑誌は社会の問題について一般の人々が議論を行う場としてみなされており、その議論に用いられる言語によって参加する人びとの範囲が規定されていた。この当時、教育などを通して浸透してきていたローマ字表記のマレー語が非ムスリムを広く議論に巻き込むことを可能にしたのに対して、一貫してジャウィ綴りのマレー語で発行され続けた『カラム』は、マレー・ムスリムのみが議論する場を提供する役割を担っていたといえることができる。『カラム』誌面で「祖国(tanahair)」という表現はマラヤを指しており、『カラム』はマレー・イスラーム圏、特にマラヤのマレー人を読者として想定し、発行されていた論文と位置付けることができる[山本 2002:264]。

『カラム』が発行されていた1950年から1969年までの時期は、マラヤ(1963年からはマレーシア)が独立国家として成立する過程で、近代的な国民教育制度を整備、確立しようとしていた時期にあたる。教育の近代化が発展、拡大しつつあった状況を、当時のマレー・コミュニティがどのように理解し、感じていたのかを、『カラム』の教育関連の記事を通して検討したい。そのことを通じて、マレー・ムスリムが公教育の近代化に対して二重の危機感を抱いていたことがうかがえるだろう。

2. マレー・コミュニティの危機感

1950年代および1960年代は、マラヤにおける「公教

育制度の確立期」であった。マラヤを独立した国家として統合するために民族ごとに分断されていた学校体系を見直し、統一的な公教育制度の確立が重要な課題と認識されていた¹。この時期に、バーンズ報告(1951)、ラザク報告(1956)、ラーマン・タリブ報告(1960)が発表され、これらの報告書をもとに約10年でマレーシアの公教育制度がほぼ確立されることとなった。この公教育制度は、マレー人の母語であるマレー語(国語としてはマレーシア語と称する)を中心としていたことが大きな特徴である。加えて、民族別に発展した学校体系を廃し、全ての民族の子弟をマレー語および英語を教授用言語とした同一カリキュラムの学校で学ばせる「国民学校構想」が模索されたり²、その後、華語およびタミル語の母語小学校が「国民型」学校として存続が認められたものの、将来的には「国民学校」へ近付けていこうとする「完全変更」が意識されたりした³。これらの政策的対応はマレー人を中心に据えた国民教育であると評され、「マレー化を志向するもの」「マレー・ナショナリズムを反映したもの」「マレー色の強いもの」などと言われ、時には「他民族をマレー人へ同化する政策」という強い表現が用いられることもあった⁴。

これらの政策的対応に危機感を感じた人々としてこれまで取り上げられたのは、主に華人およびインド人コミュニティであった。それらは、マレー人の意向により確立された公教育制度に対して、民族の独

1 英領マラヤにはマレー語、英語、華語、タミル語を用いた母語学校(vernacular school)が存在し、それらを公教育制度の中にどのように位置づけるかが課題となっていた。

2 1951年に発表されたバーンズ報告(Barnes Report)によって、全民族が共通にマレー語と英語で6年間の無償教育を受ける「国民学校」構想が提唱された。華語やタミル語はあくまでもひとつの科目として教えることが提案された。これに反対の意を唱える形で、華語およびタミル語の学校の存続の必要性を主張したのが同年に発表されたフェン・ウー報告である。

3 ラザク報告(Razak Report)に、究極目標(国語であるマレー語を媒体とするひとつの国民教育制度の下に全民族の子どもが集うこと)が明示された。

4 竹熊(1998)、Kua(2005)など。

自性を維持するために母語を用いた教育およびそれを行う機関である学校存続を要求する華人およびインド人という構図を前提とした議論であることが多い。また、マレー人に関しては、国家指導者らによって立案された教育がマレー・コミュニティの教育に対する意向を反映したものであると捉えられる傾向にある。

確かに、マラヤが近代的な国家として独立するにあたり、マレー人たちはマラヤの地における先住性を主張し、マレー人の特別な地位の保証を要求した。教育においても、マレー人の社会経済的上昇のためには教育水準の向上が必要であると考えられ、マレー人に対する公教育を受ける機会の拡大と、そのための施策を講じることが求められた。

『カラム』の記事においても、国家の公教育(国民教育)政策をマレー人の発展の重要な手段と捉えた論を展開しているものがある。マラヤ連邦の独立から10年を経た1968年12月、『カラム』の218号に掲載された「教育の目的と制度(Tujuan dan Sistem Pendidikan)」では、マレー人が個人(individu)、社会(masyarakat)、民族(bangsa)として発展し、また、マレーシアが先進工業国となるためには国家の公教育政策が重要であるとし、そのためには公教育の目的を明確化し、その達成に適した教育制度を整備するべきであるとの主張を行っている[Qalam 1968.12:39-41]。

教育制度は、国民(warganegara)の望んでいることを満たし、才能をさらに発達させるために、国家が整備するものである。(制度が整備された)後に、発展へと導かれる。民族(Bangsa)の発展レベルに対する国民教育制度の影響は間違いなく大きい[Qalam 1968.12:39]。

上記の主張は、当時のマレー人の公教育に対する一般的な見解とよく似たものとして理解できる。しかし、『カラム』でこの時期に多く展開されている議論はむしろ、近代西洋的な世俗教育に基づく公教育制度の確立や、普及拡大への危機感を示唆するものである。その危機感には2つの側面があると考えられる。

第1点目は、民族の差異に関係なく国民教育制度が施行されることで、マレー人の先住者としての特権的地位や優位性が失われることへの危機感である。全ての民族が同等にひとつの国民学校体系に集うことになれば、マレー人も華人もインド人も関係なく等しく「マラヤ」の市民として教育機会や予算が分け与えられることになる。民族という縦割りが教育政策においてなくなれば、公教育におけるマレー語の

優位性や、マレー人の教育機会拡大への優先的な予算分配などの措置が取られなくなる。近代西洋的な教育に対するマレー人のアクセスの増加や、それにもなう教育水準の向上がマレー人の社会経済的な発展に大きな影響を与えると評価していた一方で、この教育が民族の差異のない制度として整備されれば、マレー人としての特権を奪われることにもなるという危機感も同時に持ち合わせていた。

また、『カラム』の記事からは、近代西洋的な教育の拡大普及に伴う伝統的な教育や価値観の希薄化に対しても危機感を持っていたことがうかがえる。例えば、82号(1957年5月)に掲載された「女性と教育(Perempuan dan Pendidikan)」では、以下に要約した内容が主張されている。

女性は、家庭の秩序を保ち、国家や民族の反映に貢献できる善良な道徳心をもった子供を育てる責務を担っている。男女が共に生きる為に協働することは神(Allah)に定められたことではあるが、そのために担う役割には男女それぞれに適性がある。女性がその性役割に従い、子供を責任持って育てることが、「我々の民族(bangsa)」の発展と、祖国(tanahair)または国家(Negara)の安寧につながる。何故ならば、民族および祖国は家族を集合させたものであり、女性が家庭における性役割を担わなければ、家族の秩序は乱れ、それが結果として民族や祖国の弱体化に繋がるからである。従って、女性を軽視し、女性が性役割を全うするために必要であること(教育)に出費を惜しめば、それは家族秩序の崩壊となり、その結果、社会の弱体化、自民族・祖国の弱体化にまで繋がるだろう。将来への危機感、および過去の過ちに気づいている我々を、神は既に正しい方向に導いて下さっている。それは女子/女性に適切な教育を与えることである[Qalam 1957.5:44-45]。

ここでは、今後の国家および民族の繁栄のためには家庭教育において適切で善良な道徳心を育てる必要があるとされる。家庭教育は伝統的に女性の役割であり、これは神によって与えられた適性であるという前提がある。家庭教育を担うのは女性であるという性役割観に関する議論や疑問は一切出てこない。もっとも、一方では「女性が担うべき責任である」としながらも、「このような重要な役割は女性にしか鍵を握れない」とし、責任として押し付けるのではなく、いわば天職であるとの言いまわしを用いている。近代的な国家としての独立を目前とした1957年の5月に出されたこの記事は、近代化に伴い、性役割観という西洋で非近代的とみなされるものを改善していこうという主張ではない。これまでの伝統的な性役

割観は発展を阻害するものではなく、むしろ発展を導くために必要なものであるという立場をとる。

このような危機感の中でも、マレー・コミュニティが『カラム』で特に大きく議論を展開したのはイスラームの存在感の希薄化である。これが近代西洋的な公教育の発展に伴うマレー・コミュニティの危機感の2点目である。『カラム』誌上の教育を題材とした記事にはイスラームに関連するものが最も多く、近代西洋的な公教育の発展に伴うマレー・コミュニティの危機感の中でもイスラームに関する議論が中心となっている。記事は主に、近代西洋的教育と共に西洋の価値観がマラヤに広まるにつれて、イスラーム自体やイスラームについて学ぶことが軽視されつつあることを問題視するものが目立つ。

第62号に掲載された「教育問題 社会に対する我々の義務と責任——有害な影響 (Soal Pendidikan Kewajiban dan Tanggungan Kita kepada Masyarakat Pengaruh yang beracun)」は、西洋 (barat) 世界からマラヤの地に及ぼされる有害な影響 (道徳観の低下、イスラームの軽視) を懸念する議論を展開している記事である [Qalam 1955.9:30-31]。本記事では、以下のような指摘や主張がなされている。

彼ら (マレー・コミュニティ) は宗教教育に見向きもしない。(中略) 子どもたちは完全に、よそ者の学校 (sekolah asing) に通っている。彼らはイスラームを学ぶことにもう興味がなく、彼らは西洋の教育により興味がある。

近代西洋的な世俗教育をより好み、イスラーム教育への関心が薄れた結果、自分の抛りどころとなる指針を見失っている状態にある。

貧困、不確実性、飢えをアッラーよりも恐れていると状況を不安視している。

彼らはイスラームの教えに基づいて自己を確立していないため、自分を律することが出来ず、欲望を満たすためにダンスやアルコール、ギャンブルといった娯楽に手を染めている [Qalam 1955.9:30]。

上記の記事では、西洋的な近代教育がもてはやされ、イスラーム教育が軽視されつつある状況に危機感を抱き、イスラームに関する本や雑誌を通してでもイスラームを学ぶべきであることなども提唱している [Qalam 1955.9:31]。

また、第77号に掲載された「半島のイスラーム教育 (pendidikan Islam di Semenanjung)」の記事では、以下のような主張が展開されている。

マレーの土地 (Tanah Melayu) であるマレー半島の教育の現状は様変わりしつつある。もともとこの地はイスラーム王国 (Negeri2 Islam) に起源をもち、イスラームの

習慣を持ち、イスラーム法に従い、イスラーム名を持つ。

全ての子どもたちは、生まれてその舌が語り出すまで清らかな存在である。両親が子どもを異教徒にしている。明らかに、教育は人間形成にとって特別なもので、もしよい教育が施されれば民族や宗教にとってもよく、もし教育が機能不全であれば、民族や宗教も崩壊する。何故ならば、教育は生にも死にも向かわせることのできるものであるからである。

ムスリムは、キリスト教や (イスラーム以外の) 他の方で教育がおこなわれている地で健全な生活はできないであろう。

キリスト教やその趣向で構成される教育は、イスラーム社会では繁栄できないだろう。

私たちが受容した西洋の教育 (Pendidikan barat) に、カティブやピラルの声はあまり影響を及ぼすことはない。

イスラームは、これまでアルコールが悪であると考えてきたが、我々の国の多くのイスラーム同胞たちは、(最近) アルコールを威厳や自尊の証とみなしている。

少女たちは、昔はトゥドゥン (女性が被るヴェール) を脱ぎ、頭を見せることを恥じたが、今では家でも道でも公共の場でも躊躇なく脱ぐ [Qalam 1956.12:20-22]。

上記の記事は、マレー半島はイスラームを基盤として形成されてきたということを前提としており、従ってこの地に最も適応する教育はイスラーム教育であるとの立場を取る。従って、現在マレー半島の地で受容されているキリスト教を基盤とした近代的な教育では、マレー・コミュニティは健全な生活は送れないし、ましてや発展、繁栄をもたらすこともないだろうと主張する。しかし、近代西洋的な教育の影響が高まるにつれて、イスラームが影響を及ぼせなくなっていると感じており、その結果、以前では考えられなかった道徳観の変化 (酒を飲む、女子が公共の場でトゥドゥンを脱ぐなど) が起きていると危機感を募らせている。

これらの記事は、独立後のマラヤにおいてマレー・コミュニティの道徳観や信仰心の低下が起こっており、その原因として、イスラームを学ぶことを軽視する傾向が強くなったことを挙げている。また、手近な利益や快楽を好み、それに沿った行動をとるのは、自分を律するための指針が人々の精神に根付いていないからであると批判しており、そのような自律心はイスラームの信仰を深めることで根付くと主張する。マレー・コミュニティや、この地にこれまで築かれてきた王国 (negeri) は、イスラームを基礎として築かれてきたものであり、キリスト教の文化や価値観を基礎とした近代西洋的な教育はこの地の風土には適応せず、人々を悪い方向へと導いている。このため、

民族、祖国、国家の繁栄には、マレー・コミュニティに属する人々が善良な道徳心を持つことが必要であり、それはイスラームによってのみもたらされるものであると強調する。これらの、近代西洋的な公教育の拡大と普及に伴うイスラームの存在感の希薄化に関する議論を展開することを通して、何を根本的な問題としているかは2つの見方ができよう。

まず、記事の中でも再三述べられているように、イスラームの存在感の希薄化に伴う「マレー・コミュニティの道徳心の低下や悪い習慣の蔓延」を問題点の核心として捉えているという見方である。その原因を近代西洋的な価値観やキリスト教を基盤とした近代教育に見出し、それを解決するには希薄化してしまったイスラームの存在感を強化することが必要であるという主張を行っている。これは、近代西洋的な教育および価値観が実際に悪い習慣や道徳心を人々にもたらしているとする立場である。

もう一方は、イスラームの存在の希薄化そのもの、つまり「イスラームを学ぶことを重要視しない傾向」や「イスラーム教育の弱体化」が起きていることを問題の核心とする立場である。イスラームの存在感の希薄化をもたらした近代西洋的な教育の存在を問題視し、それを主張するために「近代西洋的な教育によって道徳の墮落や悪い習慣がもたらされた」という説明を手段として、近代西洋的な教育のマラヤの地への不適応を指摘し、イスラーム教育の意義を強調する方法を採用している。

いずれの立場からの議論にせよ、これらのイスラームの存在の希薄化に関連する危機感を論じる記事の特徴は、危機感を訴えることを第一の目的としているということである。近代西洋的な教育や、価値観が実際どのようなものと捉えているのかに関する記述はない。従って、近代西洋的な教育や価値観の具体的にどのような側面がマレー・コミュニティに有害な影響を及ぼしているのかに関して論証しようとするものでもなく、マレー・コミュニティにキリスト教に基づく近代西洋的な教育がなぜ適さないのかについても「イスラームを基盤にした社会であるから」以上のことを説明しようとするものでもない。これらの記事は、とにかく、「近代西洋的な教育および価値観によってもたらされた、イスラームの直面している深刻な危機」を訴えることを目的としているものである。

3. マレー・コミュニティの子どもの教育——教育哲学の検討

先に取り上げた記事は、マレー・コミュニティにおけるイスラームの存在の希薄化に危機感を持ち、記事を通してそれを広く訴えることを先ずの目的としていた。従って、西洋近代的な教育や価値観とは具体的にどのようなもので、そのどのようなところに問題があるのか、問題や有害をもたらしていて、マレー・コミュニティに適応するものではないとしながらも、それを具体的に論じようとするものはなかった。その中で、1962年9月に発行された『カラム』146号に掲載された「教育が若者を成長させる (Pendidikan membentuk tunas2 muda)」は、近代教育の思想的基礎となった教育哲学およびそれに関連するものを具体的に取り上げながら、子どもの成長に必要な教育とはどのようなものであるかについて論じることを試みたものである。「危機感を訴えること」を目的とした記事においては具体的に紹介されることのなかった「近代教育とはどのようなもので、それを形成する価値観とはどのようなものであるか」を具現化した上で、この地の子どもたちが善良な道徳心をもった人間として成長するためには、民族や国家の発展のために必要な教育とはなにかについて論じている。

最初に記事の中で取り上げられているのはジャン・ジャック・ルソー⁵である。ルソーの著書『エミール』で展開される教育論は西洋の近代教育の基礎となつたと評され、ルソー自身は「近代教育思想の祖」と表現される。本記事では、ルソーの思想を以下のように説明している。

…彼の著書『エミール』の中で、彼は特に子どもが精神的にも、身体的にも自由に成長する権利を持っていると主張している。彼は「万物をつくる者の手をはなれるときすべてはよいものであるが、人間の手にうつるとすべてが悪くなる」と言う⁶ [Qalam 1962: 32]。

ルソーの教育論の根底にあるのは、いわば「性善説」

5 ジャン・ジャック・ルソー (Jean Jaques Rousseau) は1712年にスイスのジュネーヴで生まれる。生涯の大半をフランスで過ごした。フランスの哲学者、教育思想家。代表作は『社会契約論』『エミール』。ルソー以外に本記事で取り上げられたのは、スイスの教育思想家ヨハン・ハインリッヒ・ペスタロッチ (Johann Heinrich Pestalozzi) およびペスタロッチの弟子で、幼稚園という言葉を提唱したドイツの教育者のフリードリヒ・ヴィルヘルム・フレーベル (Friedrich Wilhelm Fröbel) である。

6 この1文は『エミール』第1編の冒頭文 [ルソー 1962: 27] である。

である⁷。人間はもともと完全なる「善」をもつ存在であるが、この世に生まれた瞬間から他の人間との接触によって「悪」を身につけていくという考え方である。意図的に人間の手を加えれば加えるほど人は「悪」を身につけていくため、できるだけ自然な成長を見守る方がよいとする⁸。その一方で、ルソーの「性善説」と対照的な立場にある「性悪説」として、仏教およびヒンドゥー教の思想を取り上げている。

一方で上述した考え方(性善説)と異なる考え方もあり、ブラフマン、ヒンドゥー、仏教などがその考えを持つ。彼らは、人間は本来「悪」として形成されているという[Qalam 1962.9:32]。

「性悪説」では、人間の本性は「悪」であり、人間は自然のままにしておく欲望のままに動き、結果として社会を破滅させることになる。「悪」の根源である欲望を律し、秩序を身につけることが必要であると主張する。ルソーの「性善説」が、可能な限り人間の手は掛けず自然の成長に委ねることがよいとするのに対して、「性悪説」は自然の成長に委ねれば人は欲望のままに動く存在であるため、「善」を身につける訓練をしなくてはならないとする。近代教育思想の祖であるルソーの「性善説」を説明するとともに、その対照的な立場である「性悪説」についても紹介し、両者の立場を踏まえた上で、記事の筆者は次のような意見を述べる。

しかし、両者(性善説と性悪説)の見解のどちらも完全に受け入れることはできない。なぜならば、もしすべての人間が最初は善として創造されているのであれば、彼が(後に)身につける悪は他の人間からもたらされた病理であることになる。その方法で、人々が悪の病理に侵されるのであれば、他人からもたらされる悪はどこから来たものであるのか。すべての人間が、最初は悪であるのなら、何故我々は善い人と出会うことができるのか、またその善はどこからきたもののなのか。

もし中庸という道が選択できるのであるとすれば、それがより妥当であると感じる。神は子どもに善も悪も具え、創造した。(生を受けたあとに)教えられた知識によっては、子どもを善い道へも悪い道へも導くこととなる[Qalam 1962.9:32]。

「性善説」も「性悪説」も実態に照らし合わせた際に、

7 以下、本稿では『カラム』誌の議論の紹介を簡便にするために「性善説」「性悪説」という表現を用いる。

8 ルソーの「性善説」と同様の教育思想として、筆者は Seqaret および Zainun を取り上げ論じている。Seqaret は、すべての人は善として創造されたと説明され、Zainun に対しても「善である神によって創られたこの世界は全体として善で創造されており、その一部である人間もまた善であると主張する」と記事で説明がなされている[Qalam 1962.9:32]。

現実の世界にはあてはまり難いことを指摘し、その上で「その真ん中」を採用する必要があるとの立場を示す。その主張の根拠としてクルアーンを用いて説明を行っている。

このような考え(性善説と性悪説の中間を採用すること)は、神(Allah)によって与えられた理由に基き認められたものである。コーランは以下のように強調している。「我々は2つの眼、(ひとつの)舌、上下の唇を人々に与え、我々は彼らに2つの道を示した」。この道とは、他でもなくまさに善と悪のことである。これに加え、クルアーンの中では以下のような言葉が与えられている。「既に我々は人々に道を示し、それは syukur(恵)と kafir(邪)である」[Qalam 1962.9:32]。

人間は、「善」「悪」の2つの道が用意されているとし、その上で人間が善を身につけ、善の道を進むためには何を必要としているか、イマム・ガザリ(Imam Gazali)の言葉を引用して、その結論を筆者は示そうとしている。

子どもたちは清らかな状態で創造され、その後、運命的に両親と繋がる。それと同時に、彼らは異教徒(Yahudi, Nasrani atau majusi)となる。イマム・ガザリは「子どもたちは善と悪とを併せ持つよう神によって創られた。子どもを善にも悪にも変えるのは、父と母である」と主張している[Qalam 1962.9:32]。

筆者は、現実には起こっている世界に適応する考え(この世には最初から「善」の道も「悪」の道も両方用意されている)の妥当性を、クルアーンを用いて説明する。更には、イマム・ガザリの言葉を引用する形で、子どもたちが「善」を身に着け、「善」の道を進むために必要なのは、両親からの教育つまり家庭教育であると結論付ける。国家や民族の発展を担う善良な道徳心を持った子どもを育てる場は家庭であると主張する。本記事で展開された議論から、以下のことが読み取れるのではないかと考える。「近代西洋的な教育」とはどのような思想のもとに成り立っているのかを具体的に紹介した上で、その思想は現実の世界には適応しない部分がある。つまり、現実の世界＝マラヤとも捉えることが可能であり、マラヤの地に起こっている現実にも近代西洋的な教育を形成する思想は適応しないことを示唆していると理解できる。更に、現実に対応した考えとして「性善説」と「性悪説」の中庸を採用し、その根拠をクルアーンに求めたこと、更にそれを担うのは両親であるという結論をイスラーム指導者であるイマム・ガザリの言葉を借りて主張したことなどから、この地に適応した考え方はイス

ラームに基づいていると暗に主張しているものとも捉えることが可能である。更に、善良な道德の教育の場を「家庭」およびその担い手を両親としたことで、民族や国家の発展を担う精神をもった人材は、近代西洋的な学校や価値観ではなく、イスラームに影響を受けたマレー・コミュニティの伝統的な価値観であり、家庭によって育成されるという考えに繋がっている。

4. おわりに

『カラム』を通して展開されたマレー・コミュニティの教育に関する議論には、公教育の近代化によって発生した変化に対する危機感を示すものが多く見られた。特に、公教育の近代化、拡大に伴うイスラームの存在感の希薄化への危惧が強く表明された。公教育を手段としたマレー・コミュニティの教育水準の向上、そして社会経済的発展を期待する考えがあった一方で、それに伴う様々な変化に対する不安も同時に人々の多くが抱えていたことが『カラム』の場で吐露され、表現されている。ただし、多くの人は、近代西洋的な価値の流入、近代教育の拡大に不安を感じつつも、それに伴うコミュニティの変化がどのような実態を持つものなのかに関しては漠然とした認識をもっているに過ぎなかった。公教育の近代化がもつ思想を具体的に理解した上で、どのような点がマレー・コミュニティに適應しないかなどについては明確な見解があるわけではなく、「近代的な教育や価値の拡大によってマレー・コミュニティに起こる事態、変化」へ差し迫る危機感を覚え、それをまず表明する必要があると考え記事にすることが多かったと考察する。ただし、その中でも、ただ「有害」「不適応」と断ずるのではなく、相手(西洋側)の思想を具体的に理解した上で、それとマレー・コミュニティまたはマラヤの関係を改めて検討しよう(無批判的な受容でも、根拠のない拒否でもない形で)とする記事も見られた。その上で、近代西洋的な教育の基礎となる思想の問題点をマラヤの実態と照らし合わせた上で指摘し、その解決策をイスラームに基づいて説明しようとする試みが見られた。また、子どもを善良な道德心を持つ人間として育てる場として重要なのは、家庭教育であり、その担い手は両親であることを主張する考えがこの時代に重要視され、主張されていた。1950年代および1960年代は公教育確立期にあたり、

民族や国家の発展に貢献する人材となるためには近代西洋的な公教育をより多くの人が受ける環境を早急に整備することが重要であるとの理解が膨らんでいた。ただ、近代教育で「生きるための手段」を学ぶ一方で、「いかに生きるか」、「善良な道德をいかに身につけるか」といった道德教育は家庭やイスラームを主軸としたコミュニティにその場を委ねようとする考えがあったことが『カラム』を通して明らかとなった。

参考文献

- 竹熊尚夫(1998)『マレーシアの民族教育制度研究』九州大学出版会。
- 西芳実(2002)「ジャウィ誌『カラム』とマレー世界のムスリム」『JAMS News』No.22, pp. 34-37。
- 山本博之 (2002)「資料紹介『カラム』」『上智アジア学』第20号, pp. 259-343。
- ルソー(今野一雄訳)(1962)『エミール(上)』、岩波書店。
- Kua Kia Soong. (2005). *The Malaysian Civil Rights Movement*. Petaling Jaya: Strategic Information Research Development.
- Rosnani Hashim. 2004(1996). *Educational Dualism in Malaysia: Implication for Theory and Practice*. Kuala Lumpur: The Other Press.